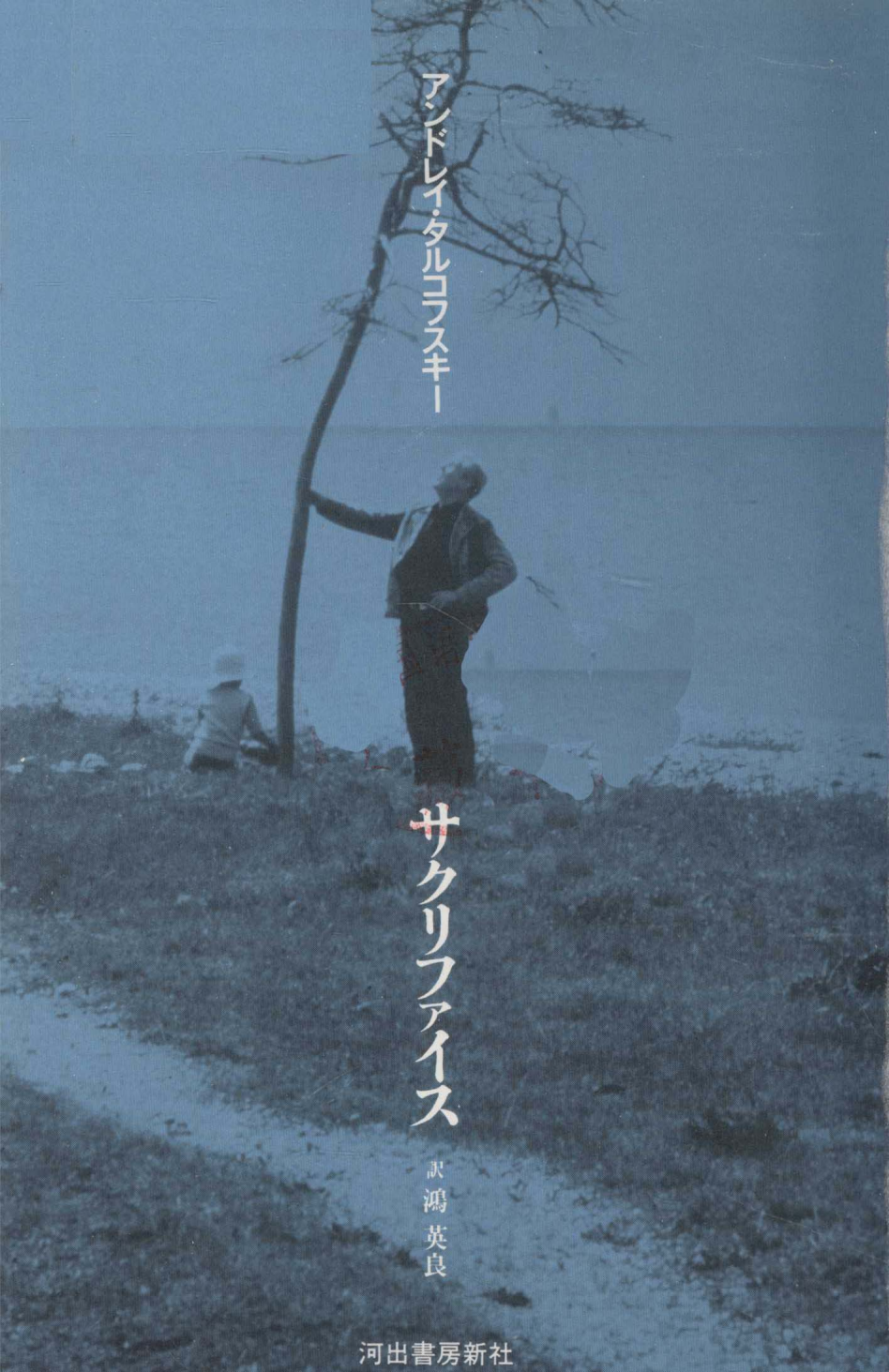
サクリファイス

アンドレイ・タルコフスキー

訳 鴻 英良



アンドレイ・タルコフスキー

サクリファイス

訳 鴻 英良

河出書房新社

訳者略歴　鴻 英良（おおとり・ひでなが）
1948年、静岡県生まれ。東京工大卒。
専攻ロシア文学、演劇。
現在、東京工大非常勤講師。
訳書 カントール「死の演劇」
（パルコ出版 共訳）他。

サクリファイス

初版発行　1987年5月25日
再版発行　1987年8月10日
著者　アンドレイ・タルコフスキー
訳者　鴻 英良
発行者　清水 勝
発行所　株式会社 河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2
電話　03（404）1201（営業）
03（404）8611（編集）
振替口座　（東京）0-10802
印刷　暁印刷
製本　若林製本
©1987 Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります。
落丁・乱丁本はおとりかえします。
ISBN4-309-20093-1

目次　サクリファイス

5　散歩
33　戦争
71　祈り
79　魔女
101　朝
111　救急車
119　キャスト&スタッフ

120　訳者あとがき

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

サクリファイス

散歩

白夜の季節が近づいていた。あたりには風ひとつなく、太陽はすでに岩山のうしろに隠れていた。木々に覆われた頂の彼方で、空だけが日に映え、入江の浅瀬にその姿を映していた。まるで、時間が止まったような、至福の感覚が漂っていた。

凍りついたように動かない松の木立のなかに、窓框(かまち)をペンキで明るい色に塗った、屋根の高い木造の家がたっていた。

板張りのテラスの上で、女たちが、テーブルに、糊のきいた白いテーブルクロスを掛けている。煙と自家製のクッキーの匂いがしていた。木立の奥の紐に、乾いた洗濯ものがかかっていた。

海岸線の入りくんだ海に向って、なだらかに傾斜している谷間の日の陰ったところに煙

が集まり、澱んだ霧のようにたちこめていた。その霧のなかの石の多い道を、沿道の松が、水銀のようにきらめく下の入江まで、まるで亡霊のように、憂鬱そうに連なっていた。

自転車のベルの音が聞こえた。肩から郵便袋を提げた、不精髭の男がその家にあわただしく乗りつけた。

「アレクサンデル奥様……あっいけない、アデライーダ奥様！　また来ました！」彼は叫んだ。「また電報です！　サインは奥様ですか、アレクサンデル様ですか？」

「こちらへいらして！」白い服を着た背の高い若い女がテラスから答えて、木の階段を降りてきた。彼女は不機嫌そうな、若いわりにはどことなくさえない顔をしていた。「よこしてちょうだい、私がサインするわ」と彼女は言った。「アレクサンデルはいま坊やと下の入江に行っているの。」

「いいですよ、お嬢様、私が届けましょう。自転車ですからたいしたことありません。むしろ、嬉しいんです……」郵便配達夫はもう、壊れたスポークをがちゃがちゃ鳴らしながら、自転車を走らせ、フレームを跨いで、走りながらサドルに腰を下ろした。

「お祝いなんですね、わかります！」あたりを見回して、彼は笑った。「電報ですっかり埋まってしまいますね！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「今晩、夕食にいらして、ご一緒にお祝いしてくださいな！」後ろから追いかけるように女主人が叫んだ。派手に髪を結いあげた、泣き腫らしたような目をした中年の女である。「ありがとうございます、アデライーダ奥様！　本当によろしいのですか。それなら、必ずお伺いします！」遠くのほうから声が届いた。自転車のベルが悲しげにチリンと鳴り、それからすべてが静まり返った。

しばらくのあいだ女たちは彼のうしろ姿を見送っていた。花を一杯に活けた花瓶を持って、白いエプロンをつけた女中がテラスに出てきて、テーブルのそばで立ちどまった。彼女は耳を澄ませた。

「なんて静かでしょう……」彼女は小声で言った。これは二十八歳ぐらいの均整のとれた黒い髪の女だった。健康そうで、頬は赤く、きらきら光る挑戦的な目をしていた。

郵便配達夫は陽気に坂を下っていった。白っぽい石の多い道に沿って進み、老いた松の木立を迂回し、長い柵の側を通りすぎたところで、彼は少し速度を落とすと、自転車を止め、ぐらぐらする松の木にもたれ掛かった。彼は耳を澄ませた。

「静かだ……完全な沈黙……」彼は小声でつぶやくと、あたりを見回してつけ加えた。

「『……そして半時間ばかり、天に沈黙があった……』（ヨハネ黙示録第八章第一節）」

アレクサンデルは、道が大きくカーブするところにほど近い崖の淵に、膝に乗った坊やを抱くようにして、坐っていた。ふたりの下には入江の水が、曇った鏡のようにじっと澱んでいた。

坊やは声帯の軽い手術をしたばかりなので、喋るのを医者に禁じられていた。首に包帯が巻かれているため、とてもみじめに見えた。

父親は多分、随分前に始めた話をつづけていた。

「パパとママはちょうどこのあたりに車を停めた。」彼はあたりを見回した。「そう、この近くだった。それから歩きだした。それで、要するに、迷ってしまった。ここは初めてだった。そのとき雨が降りはじめた。小雨だったけれど、いやな雨でね。秋の雨はいつもそうだ。みんな機嫌が悪くなり、わけもなくいがみあいを始める。ぼくらはあの曲り角までいった。あの曲った松の木が生えているところだ。そのとき、ちょうど日がさしはじめ、雨があがった。そしてここいらはすっかり光に包まれた！　すると突然、パパが、つまりママとパパとが、あの家に、あそこの、松の木立のなかに住んでいないということが残念

に思えてきた。ここよりも素晴らしい場所は、どこにもないだろうし、ありえないだろうって思えた。それほど美しく見えた。そして、ここに住んでいれば、死ぬまでずっと幸せでいられるだろうと思ったんだ……」

坊やはまじまじと父親をみた。

「どうした？　怖くないよ！　怖くないさ、坊や！　死なんてないんだから。あるのは、実際、死の恐怖だけさ。この恐怖はとても忌わしいもので、そのため、多くの人は、してはならないことをしてしまう……いいかい、みんなが死を怖がらなくなれば、すべてがすっかり変わるんだ、そうだろう？　死の恐怖をなくしさえすれば。学者たちは、この恐怖が必要だと考えている。身を守るための手段とかいって……危険を知らせる肉体的な痛みだというんだ……ぼくはそうは思わない、賛成できない……子供と狂人は死を恐れない、とセネカは言っているけど、この思想の結論がなかなか悪くない。『理性が大いなる平穏を与えぬ者は恥ずかしきかな……』つまり、セネカは子供のような平穏、と言っているんだ。」

坊やは父の袖をつかんで引張った。

「あ……そうだ、ちょっと話が脇にそれたね。その……だから、パパたちは一緒にぼんや

りと立って、美しさに見とれていたんだ。目を離すことができなかった……静けさ、安らぎ！　そしてこの家は、まさにぼくらのために建てられたのだとはっきりわかった。そう、つまり……そして、あとで、この家が売りに出されていることがわかった。家は随分荒れていたので、高くはなかった。そこでぼくらは、すぐにこの家を買った。一瞬のためらいもなくね。これはもう奇跡といってもよかった……そして、ここでおまえが生れた。この家が好きかい？　自分の家が好きかい、坊や？」

坊やは重々しくうなずいた。それから立ちあがると、崖の反対側へ近づいて行った。下の方の入江には、霧がかかり、時折、ぼんやりと弱く光っていた。静かだった。大気は動くことなくじっとしていて、水平線の木々と、霧のように薄い雲を凍りつかせているかのようであった。

アレクサンデルも立ちあがると、地面から曲った大きな枯れた木を拾いあげ、その太い方の端を岩の割れ目に押し込んだ。

「きれいじゃないか、ね？」彼は息子に呼びかけた。「イケバーナだよ！　日本のイケバーナよりもずっと大きいけどね！」

坊やが近づいてきて、根元に腰を下ろすと、割れ目に刺した枯れた幹を石ころや土くれ

で補強した。曲っている枯れた幹は、霧のかかったちらちら光る海を背にして、実際、とても美しく見えた。

坊やはにっこり笑った。

「あのね、ずっと昔のことだが、パンベという、正教のある修道院の長老が山のなかにちょうどこれと同じように枯れた木を差しこんで、イオアン・コーロフという弟子の修道士に、その木が生き返るまで、毎日水をやるよう命じたことがある。」アレクサンデルはとても真剣そうな顔をしていた。「何年もの間、イオアンは毎日、朝になると桶に水を汲んで出かけていった。ひとつの桶を山まで運ぶのに、日の出から日没まで、丸一日かかった。毎朝、イオアンは、水桶を持って山に行き、木の株に水を掛け、夜、もう暗くなった道を修道院まで戻ってきた。こうして丸三年が過ぎた。そしてある日、イオアンが山に登っていくと彼の木に、花が咲き乱れているのを目にしたんだ！」

「……やはり、なんと言われようとも、方法、体系というのは偉大なものだ。もし、毎日、同じことを、同じ時刻に行うならば、儀式のように、規則正しく、何も変えることなく、毎日、正確に同じ時刻に、必ず、行うならば、世界は変わるだろう！　何かが変わる！　変わらないはずはない！　例えば、朝、目を覚まして、七時ちょうどに起き、洗面所に行

き、蛇口からコップに水を汲み、それを便器に流す、それだけでいい。」

坊やは両手で顔をおおって、黙ったまま笑った。坊やは笑うことも禁じられていた。

「しばらくすると、このコップのためになにかが起こる、起こらないはずはない！　いや、パパはまじめに言っているんだよ！　例えば、軍隊は歩調を揃えて橋を渡るのを禁止されている、橋のうえを行進するのを禁じられているのを知っているかい？　知らない？　じゃ、なぜだかわかるかな？　たくさんの足が、リズムをとって歩くと、このリズムがものすごい力で橋を揺さぶり、橋を壊してしまうからだ。一度も聞いたことがなかった？　さっきの水の入ったコップのように、毎日の繰り返しはなんでもリズムを持っているだろ？」

自転車のベルがチリンと鳴った。アレクサンデルと坊やは振り向いた。郵便配達夫が自転車から降り、自転車を道ばたに倒した。

「さあ、アレクサンデルさん、今日はもう簡単には逃がしませんよ。今晩、あなたの誕生日のお祝いに招待されましたから。これは、たいへん光栄なことです！」彼は、カバンから電報を取り出すと、それを振り回した。「これでもうおしまいです。郵便局が閉まりましたから、遅れた人は明日まで待たなければなりません。サインをお願いします！」郵便配達夫は電報と鉛筆、それにサインをしてもらうために受領書を差しだした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com